

南岳慧思の『立誓願文』

——「自著年譜」の真偽について——

山野 俊 郎

中国仏教における正像末三時説の成立という課題を考える時、従来から、南岳慧思（五一五—五七五）の『立誓願文』が重要な意義をもつ書物として取り上げられ、慧思は中国で初めて末法説を明確に表現した仏教者と見なされてきた。しかるに、一方では、『立誓願文』の偽撰説も盛んに唱えられている。本書は大きく、三時説を述べる部分、慧思の半生を綴った自叙伝の部分（『「自著年譜」と称される）、及び願文の部分の三段に分けることができる。このうち、とくに正像末三時説の部分について、それが後世に作成され、『立誓願文』のオリジナルなテキストに附加されたものであると見なし、慧思に末法説があったことを否定しようとする意見も、しばしば提起されてきている。一方、自著年譜の部分は真撰と見なされ、慧思の伝記資料として無批判に利用されるのが通例であった。自著年譜には、慧思が悪比丘や悪論師たちから、たびたび深刻な迫害を受けたことが記されるが、そのような自著年譜に見られる度重なる受難の記事が、慧思が末法説を抱くに至った要因の一つとして、従来、しばしば引き合いに出されてきたのである。しかし、自著年譜のそのような取り扱いについて、何の問題も含まれていないのであろうか。慧思における末法説受容の問題を考えるにあたって、まず、自著年譜の真偽について確かめておきたい。

道宣の『統高僧伝』巻十七に「陳南岳衡山釈慧思伝」を収める。彼が『統高僧伝』の最初の稿を終えたのは唐貞観十九年（六四五）であり、慧思没後およそ七十年のことである。道宣は慧思の伝記をまとめるにあたって、どのような資料を利用したのであろうか。『統高僧伝』以前に作成されたと伝えられる慧思の伝記関係の資料として、①慧思撰『立誓願文』（自著年譜）、②智顗撰『南岳（慧）思禪師伝』（現存せず）、③灌頂撰『隋天台智者大師別伝』（④晋王広が智顗の依頼を受けて製作した慧思の碑文（現存せず）、などを挙げるができる。このうち、②『南岳思禪師伝』は現存しないが、道宣は『大唐内典録』巻六において、智顗の著述を列挙する中で此の書名を記している。また、③『隋天台智者大師別伝』にも慧思の伝記関係の記述が少し含まれるが、そこに『立誓願文』の自著年譜の直接的な影響は見出せない。④については、灌頂が編纂した『国清百録』巻三所収の「遺書・晋王に与う」第六十五や同巻二所収の「王（晋王広）、朝に入り遣使して参ずる書」第四十三などの書簡に、慧思碑文の作成の事情がうかがわれる。

以上の伝記資料のうち、道宣は『統高僧伝』巻十七所収の慧思伝をまとめるに当って、智顗撰『南岳思禪師伝』を第一の資料として利用したと推定され、また、その他に④の碑文なども参照したのと思われる。もし現行の自著年譜がもともと、オリジナルな『立誓願文』のテキストに記されていたとするならば、智顗は『南岳思禪師伝』のテキストに記されていたとするならば、智顗は『南岳思禪師伝』を著わすにあたって、必ずや、師慧思の自撰になる自著年譜を参照したはずであるから、その場合、慧思の伝記記述は、慧思『立誓願文』自著年譜↓智顗『南岳思禪師伝』↓道宣『統高僧伝』慧思伝、と受け継がれていったはずである。

このように考えるならば、道宣が著わした慧思伝の中には、自著年譜の影響が明瞭に現われてくるはずである。しかるに、その内容を検討してみると、そこには自著年譜が参照された形跡は見出せないように思われる。もし道宣が自著年譜を間接的にでも参照しえたならば、彼が著わした慧思伝は更に詳細な記述を伴なったものとなったはずである。このような事実から、慧思のオリジナルな『立誓願文』には現行の自著年譜は含まれていなかったことが推測されるのである。

次に、『統高僧伝』以降、宋代の『仏祖統紀』に至るまでの、慧思の伝記を収める資料として、⑥惠詳撰『弘贊法華伝』巻四、⑦僧詳撰『法華伝記』巻三、⑧荆溪湛然撰『止観輔行伝弘決』巻一之一、⑨道原撰『景德伝灯録』巻二十七、⑩士衡撰『天台九祖伝』、⑪志磐撰『仏祖統紀』巻六、などが挙げられる。このうち、⑥～⑩について各各の内容を検討してみると、それらの記述は多く『統高僧伝』巻十七所収の慧思伝を踏まえたものであり、そこに現行の自著年譜の影響は見出せない。また、⑧について言えば、湛然は『止観輔行伝弘決』巻七之四において、『摩訶止観』巻七の「著願文云、扱扱扱扱」の文に対して、「願文（『立誓願文』

を著わすとは、其の「願」文、現に行わる」と注している。すなわち、湛然は慧思の『立誓願文』を見ていたに相違ないのであるが、それにもかかわらず、彼が記す慧思伝には自著年譜の影響は窺えないのである。しかるに、⑪『仏祖統紀』に至るや、その巻六に収録される慧思伝においては自著年譜が全面的に採用されてくるのであり、実際、著者志磐はその伝記記事が依拠した資料として、「南岳願文」の名前を明記している。

以上から、慧思が金字の經典を書写した折に著わしたオリジナルな『立誓願文』には、金字經典書写を発願するに至った経緯などを述べる簡略な造経縁起は記されていたかも知れないが、現行の『立誓願文』にあるような自著年譜は含まれていなかったと考えざるを得ない。自著年譜の部分はかなり後世に、遅くとも『仏祖統紀』が撰述される頃までに、作成され、オリジナルな『立誓願文』のテキストに附加されたものと思われる。今その間の事情を明らかにすることはできないが、自著年譜作成の背景には、慧思を、正法が障礙される困難な時代を生きた護法の菩薩として描き出そうとする時代的な要請があったものと推察される。